

2026 年度日本比較文化学会東北支部・関東支部合同 研究大会プログラム

日時：2026 年 8 月 27 日（木）13：00～

会場：東北福祉大学 東口キャンパス（仙台市宮城野区榴岡 2-5-26）

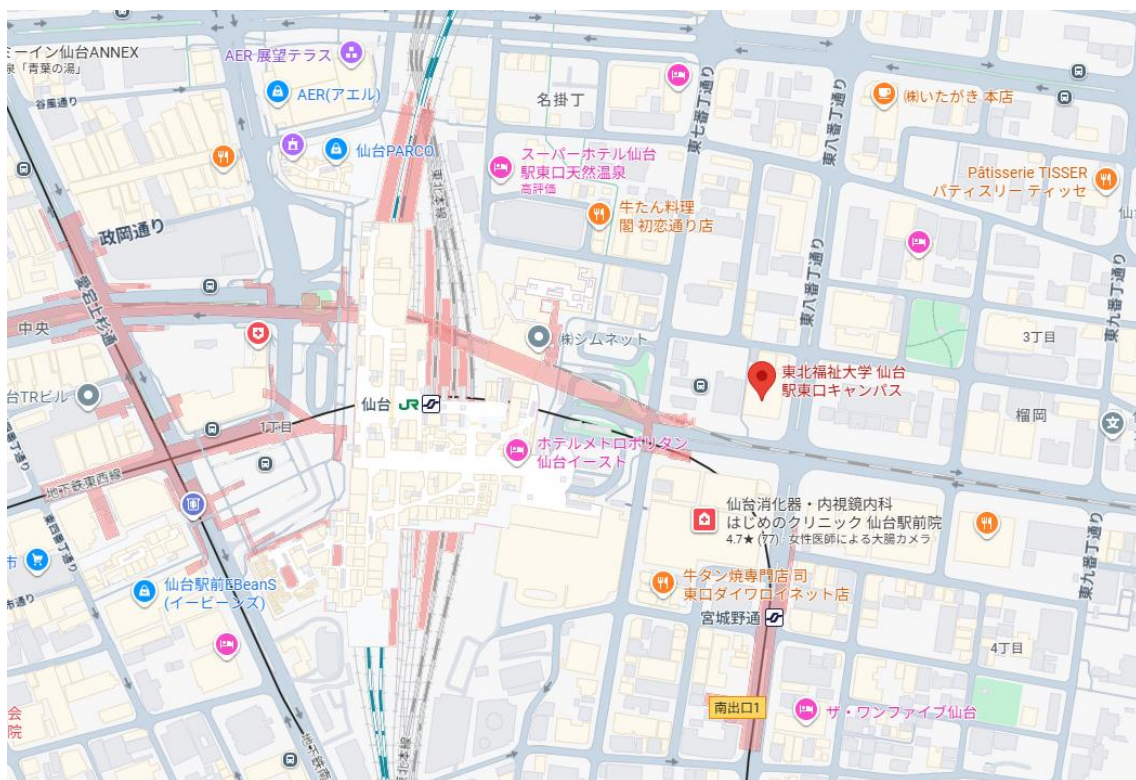
演習室 3・4（3 階）

○JR 仙台駅徒歩 3 分

○地下鉄東西線宮城野通駅徒歩 3 分

※駐車場、駐輪場はございません。公共交通機関をご利用ください。

○周辺マップ



地図データ：Google 社提供のグーグルマップ(<https://www.google.com/maps>)を引用作成

(1) 開会のあいさつ（13：00～13：05）場所：演習室 4（3 階）

日本比較文化学会東北支部 支部長 高橋栄作（高崎経済大学）

(2) 研究発表（13：10～16：30）

時刻	会場 1 (演習室 4)	会場 2 (演習室 3)
13:10～	司会：伊藤豊（山形大学） 1. 「見かけにだまされないために」 ——村上春樹『1Q84』におけるメディアと物語 堀直美（筑波大学大学院博士後期課程）	司会：郭潔蓉（東京未来大学） 1. 公的言説と日常言説における「ふるさと」：震災後浪江町の復興計画とインタビュー談話のキーワード分析 JAJOO SWASTIKA HARSH（東北大学大学院博士後期課程）
13:40～	2. 中国における川端康成『古都』の翻訳・出版 丁朔月（宇都宮大学博士後期課程）	2. コロナ禍を契機とした若年女性の性別役割分担意識の変容——意識の流動性とその形成要因に着目して—— 張思源（東北大学大学院博士後期課程）
14:10～14:20 休憩		
14:20～	司会：木鎌耕一郎（神戸松蔭大学） 3. ワシーリー・エロシェンコの反戦思想 野田晃生（運城学院大学）	司会：高橋栄作（高崎経済大学） 3. 教職課程における講義の水準と講義方法～全入時代の大学での教員養成～ 齋藤忠和（郡山女子大学）
14:50～	4. 夏巧尊訳「南京的基督」における〈現実性〉の前景化——身体・空間・宗教性を中心に 范文瓊（東北大学大学院博士後期課程）	4. 保育現場における組織的連携を支援する可視化フレームワークの研修導入——教職員の受け止め方と情報共有上の課題：第1報—— 吉田亜矢（会津大学短期大学部）
15:20～15:30 休憩		
15:30～	司会：熊谷摩耶（東北福祉大学） 5. OPI 教授法の理念に基づくタスク先行型ロールプレイの実践とその効果——中国人日本語学習者を対象に—— 張宇歆（宇都宮大学博士後期課程）	司会：長田元（岐阜聖徳学園大学） 5. 譜面と現象——譜面主義から再考する西洋科学の再現可能性 中野実花（日本大学文理学部）
16:00～ 16:30	6. 中国語母語話者の作文における一般化と訓戒 小池直子（北京理工大学／東洋大学）	

(3) 閉会のあいさつ (16:30～) 場所：演習室 4（3 階）

日本比較文化学会関東支部 支部長 郭潔蓉（東京未来大学）

※懇親会（事前参加希望者のみ）

時間：17:30～ 会場：伊達のくら 仙台東口店（会場より徒歩 3 分）

日本比較文化学会 関東支部・東北支部 合同例会

発表要旨

2026 年 8 月 27 日（木）

午後 13 時 10 分～16 時 30 分

於 東北福祉大学

会場1

「見かけにだまされないために」
―村上春樹『1Q84』におけるメディアと物語―

筑波大学大学院博士後期課程

堀 直美

本論文は、村上春樹『1Q84』（2009-2010）を、メディアが表象する「現実」を批判的に問い直す作品として読み解く。『1Q84』をメディア社会批判の観点から論じた研究は存在するものの、メディア構造と物語の関係に着目した研究は少ない。作品冒頭では、「見かけにだまされないように。現実というのは常にひとつきりです」という言葉が主人公・青豆に繰り返し伝えられる。その後、青豆は自らが入り込んだ世界が従来の現実と微妙にずれていることに気づき、この世界を「1Q84年」と名づける。論文では、そこに現れる「リトル・ピープル」を、イメージを先行させて人々の認識を方向づけるメディア構造を寓意する存在として捉え、作中で言及されるマクルーハンのメディア論と、村上春樹自身のメディアに関する言及を手がかりに分析する。さらに、作品後半で天吾が書き始める物語がイメージ先行型の世界をいかに揺るがし、それに対抗する物語として機能しているのかを論じる。以上を通して、『1Q84』が、メディアが生み出す視覚イメージによって現実そのものが見えにくくなっている社会において、善悪を自ら判断し、自らの責任において行為する倫理的主体の形成を描く作品であることを示す。

キーワード：日本現代文学、メディア論

会場1

中国における川端康成『古都』の翻訳・出版

宇都宮大学大学院博士後期課程

丁 朔月

川端康成『古都』は、中国において1981年に初めて翻訳・出版されて以来、多数の出版社から刊行され、重訳・再版を繰り返してきた作品である。従来の研究において、『古都』の翻訳表現や作品研究に関する論考は見られるものの、中国における翻訳・出版の全体像を整理し、複数の訳本を総合的に比較した研究は十分ではない。本研究は、『古都』の中国における翻訳・出版の展開を整理するとともに、主要訳本の翻訳特徴を比較し、その特質を明らかにすることを目的とする。1981年以降中国で刊行された『古都』出版物96点を収集・整理した上で、1985年の侍桁・金福訳、2014年の葉渭渠・唐月梅訳、2023年の高慧勤訳を分析対象とし、人物言語、文化固有語、自然描写の三つの観点から比較分析を行った。その結果、『古都』が中国で川端作品の中でも特に継続的に出版されてきた背景には、改革開放以降の日本文学翻訳の進展に加え、作品に色濃く表れた「日本性」が1980年代中国の「尋根文学」の潮流と親和性を有していたことが関係していると考えられる。また、三つの訳本を比較した結果、人物言語、文化固有語、自然描写の翻訳には、それぞれの出版時代や翻訳方針を反映した特徴が認められた。特に、日本文化の伝達方法については、注釈を多用する傾向が見られる訳本と、訳文自体の調整によって理解を促す傾向が見られる訳本との違いが確認された。以上の考察を通して、本研究は『古都』の中国における翻訳・出版の展開とその特徴を明らかにし、中国における日本文学翻訳・出版史の一事例として位置づけることで、今後の関連研究に資することを目指す。

キーワード：川端康成、『古都』、翻訳・出版

会場1

ワシーリー・エロシェンコの反戦思想

運城学院大学

野田晃生

本発表においては、ロシアの詩人、ワシーリー・エロシェンコについて扱う。エロシェンコは、幼少時、病気のために視覚障がい者（全盲）になった人物である。その後、エロシェンコは、日本語を身に付け、来日した。エロシェンコは、日本語で多くの作品を発表した。彼の作品からは、彼の思想がよく見られる。彼が生きた時代、第一次世界大戦、ロシア革命があった。これらのことについて彼は、徹底的に暴力的なあり方を否定した。第一次世界大戦については、彼は、軍事的、暴力的な手段を徹底的に否定し、自らの作品である「世界平和の日」を発表した。また、エロシェンコは、社会主義者であったが、ロシア革命を盲信的に信じていたわけではなかった。彼は、あくまでも自らが信じる人類愛に基づいていたということができよう。このことは、世界各地に滞在したエロシェンコの基本的な姿勢であった。エロシェンコは、社会主義者であった。彼が持っていたこの政治思想は、生涯変わることはなかった。また、彼はエスペランティストでもあった。彼は、エスペランティストとして、世界平和を生涯に渡って追求した。彼は、平和的方法を常に考えていた。これは、暴力的手段を徹底的に否定した彼の言葉であると言える。彼は、社会主義を持つと同時に、人類愛を追求しており、その一つとして戦争を否定していた。そのことは、彼の作品からも見てとることができる。彼は、社会主義者であったが、その反戦思想は、その思想を超えた先にあったということができよう。

キーワード：日本文学、第一次世界大戦、ロシア革命

会場1

夏丐尊訳「南京の基督」における〈現実性〉の前景化 ——身体・空間・宗教性を中心に——

東北大学大学院博士後期課程

范 文瓊

本発表は、夏丐尊による芥川龍之介「南京の基督」の中国語訳を対象とし、同時期の鄭心南訳・湯鶴逸訳との比較を通して、夏訳において原作の〈現実性〉がいかに前景化されているかを考察する。従来、夏訳については、その直訳的傾向や言語的特徴が指摘されてきたが、個々の訳語選択が作品理解とどのように結びつくかについては、なお検討の余地がある。本発表では、身体・空間・宗教性の三点に注目する。第一に、宋金花の身体描写では、「戏狎」「媚人的微笑」「瘦生生」などの表現を通して、私娼としての職業的身体と、貧困・寒冷・疲労にさらされる受苦の身体がより具体的に示される。第二に、原文の「利涉橋の側の飯館の前」が「利济桥畔领事馆门前」と訳され、さらに「去兜客人」「抽打」といった表現が加わることで、南京の都市空間には、外国人、私娼、人力車夫をめぐる半植民地的な権力関係がより鮮明に浮かび上がる。第三に、宗教性の表現においても、「涼しい視線」を「冷静」、「酒臭い彼の移り香」を「酒気」とする処理などから、信仰や救済が抽象的・超越的なものではなく、身体、疾病、羞恥と結びついた世俗的経験として捉え直されていることを示す。以上から、夏訳は原作を大きく改変するものではないが、細部の翻訳を通じて、原作にすでに含まれていた身体的・社会的現実の位相を、中国語表現の中でより明確に前景化するものとして位置づけられる。こうした翻訳実践は、芥川作品が近代中国語圏に受容される過程において、原作の意味が訳者の文学的・社会的関心を介して再編成されていく一端を示すものでもある。

キーワード：日本近代文学、翻訳・受容研究、中日比較文学

会場1

OPI 教授法の理念に基づくタスク先行型ロールプレイの実践とその効果 ー中国人日本語学習者を対象にー

宇都宮大学大学院博士後期課程

張 宇歆

日本語による円滑なコミュニケーション能力を備えた人材への社会的ニーズを背景に、日本語教育では実際の場面で日本語を適切に運用する能力の育成が重視されている。しかし、中国の大学における日本語会話教育では、授業時間やカリキュラム上の制約から、学習者が会話活動に十分に取り組むことが難しい。また、学習者側にも会話練習の機会が少ないことや、口語能力の伸ばし方が分からないといった課題が指摘されており、実際のやり取りを重視した会話指導法の導入が求められている。

このような課題に対応する方法として、本研究では OPI 教授法の理念に基づくタスク先行型ロールプレイに着目する。この指導法では、学習者がまずタスクに取り組み、その過程で自らの発話上の課題に気づいた後、フィードバックや表現指導を通して、言語表現や会話の進め方を学ぶ。先行研究では、タスク先行型ロールプレイが学習者の口頭表現力や学習意欲に肯定的な影響を与えることが報告されている。一方、特定の文法項目や場面を対象とした研究が多く、発話量、会話の継続・展開、相手とのやり取りを含む会話パフォーマンス全体の変化や、学習者自身による授業評価をあわせて検討した研究は限られている。

そこで本研究では、中国の大学日本語学習者を対象に、タスク先行型ロールプレイを用いた実践授業を行い、事前・事後テストと発話分析を通して、会話パフォーマンスの変化を検討した。さらに、授業前後のアンケート調査および自由記述から学習者による評価を明らかにし、中国の大学日本語会話教育への導入可能性について考察した。

本発表では、実践授業の構成と実施方法を紹介したうえで、テストの得点、ロールプレイ発話に見られた会話の継続・展開の変化、および学習者による授業評価の結果を報告する。

キーワード：日本語教育、会話学習、会話教育

会場1

中国語母語話者の作文における一般化と訓戒

北京理工大学／東洋大学（アジア文化研究所）

小池 直子

報告者は、中国の大学で日本語を教える日本語母語話者教師 13 名にインタビューを行い、教師が抱いた学習者の作文への違和感をコード化した(小池 2025)。本研究では、言及の多かった「国家・社会的な視点」(13 名中 9 名)と「呼びかけ文による結び」(同 8 名)に焦点をあてる。前者は、個別具体的な事象を社会・国家という次元へ飛躍させる一般化、後者は、不特定多数への勧奨を伴う訓戒的な結びといえる。学習者コーパスの量的研究(高橋・伊集院 2004)や学習者自身の証言(大野・荘 2016)にも同様の傾向があることが示唆されている。一方、教師は、これらが高頻度で現れる現象ではないとも述べている。では、なぜこれらの特徴に言及する教師が多いのだろうか。本研究では、JCK 作文コーパスの意見文・説明文・ナラティブ 3 ジャンルの作文を対象に、一般化・訓戒の出現頻度や強さを比較し、この問いを検討した。分析の結果、社会的提言が期待される意見文(晩婚化)や、展開がほぼ固定化される主題(私の故郷)の説明文では、中国語母語話者の一般化率は日本語・韓国語母語話者と変わらなかった。しかし個人の経験の叙述を期待されるナラティブ(私の趣味)において、中国語母語話者の作文の一般化出現率は 80%(日本語母語話者 35%)に達し、このうち国家・社会レベルにまで踏み込む事例が該当数・多様性において際立った。すなわち中国語母語話者の作文には、一般化を期待されない場面においても、個別具体的な事象を社会・国家の次元へと結びつける傾向が認められる。また、「呼びかけ文による結び」にあたる訓戒は、意見文・ナラティブ各 1 本(いずれも中国語母語話者)にとどまり、教師の証言どおり高頻度の現象ではなかった。この稀少性にも拘わらず、本来呼びかけを要さないナラティブでの出現が、日本語母語話者教師には「逸脱」と映り、記憶に残る要因になったものと考えられる。

キーワード：日本語作文、中国語話者、一般化

会場2

公的言説と日常言説における「ふるさと」: 震災後浪江町の復興計画とインタビュー談話のキーワード分析

東北大学大学院博士後期課程

JAJOO SWASTIKA HARSH

本発表は、東日本大震災と原子力災害により全町避難を経験した福島県浪江町を対象に、「ふるさと」という語が公的言説と日常言説においてどのように用いられ、変化してきたかを検討する。資料は二種あり、第一に、浪江町の三次にわたる復興計画（2012年・2017年・2021年）の全文をコーパス化し、「ふるさと」および関連語（故郷、絆、復興、帰還、移住、定住、関係人口など）の頻度と共起関係を分析した。第二に、2025年から2026年に実施した半構造化インタビュー24件で28人（帰還者8名、震災後移住者10名、非居住の関係人口10名）から、「ふるさと」と「地元」をめぐるメタ言語的言及を抽出し、批判的談話分析の枠組みで検討した。

分析の結果、復興計画における「ふるさと」の頻度は全町避難下の2012年計画で最も高く、2021年計画では約85パーセント減少した。2012年計画は、接近不能となった町域を「ふるさとなみえ」、住民が実際に生活する避難先を「町外コミュニティ」と呼び分け、「ふるさとに接する機会」の創出を政策課題とするなど、距離を前提とした語法を示した。2017年計画では「ふるさと」は先人から次世代へ引き継ぐ再生事業として再文脈化され、2021年計画では、ふるさと納税、伝統文化教育、避難継続町民との絆維持に残存する一方、人口政策の語彙は「帰還」「移住・定住」「関係人口」へと移行した。インタビューでも同一の規則が確認され、参加者は浪江を、離れている間は「ふるさと」、生活再開後は「地元」と範疇化し、その根拠として唱歌「故郷」を引用する者もあった。

以上から、「ふるさと」が不在によって生成される語であることは、行政文書と日常談話の双方で独立に確認される。行政は再定住が進むとこの語を使わなくなる。だが住民は、誰が浪江を「ふるさと」と呼べるのかを問い続けている。このずれは、復興政策における帰属の扱いを問い直す。

キーワード：言語学、ふるさと、浪江町、東日本大震災、移住

会場2

コロナ禍を契機とした若年女性の性別役割分担意識の変容 一意識の流動性とその形成要因に着目して一

東北大学大学院博士後期課程

張 思源

近年、日本社会では男女共同参画の進展や女性の就業継続の一般化などを背景として、従来の性別役割分担のあり方が変化しつつある。一方で、家事・育児などの家庭内役割については、依然として男女間で偏りがみられ、伝統的な性別役割分担意識が根強く存在している。2020年から日本で拡大したコロナ禍は、初期の医療現場の混乱、生死をめぐる恐怖、健康観念・行動の変容に加え、就業形態や生活様式、家族との関わり方に大きな変化をもたらし、これまで当然視してきたジェンダー役割を見直す契機となったと考えられる。

本研究は、コロナ禍を契機として、若年女性の性別役割分担意識がどのように変容したのか、その要因はどのようなものかを明らかにすることを目的とする。調査対象と調査方法として、仙台市の飲食業に従事する20代の未婚社会人女性20名に対して半構造化インタビューを実施した。インタビュー調査では、家事・育児に対する考え方、将来の結婚・家族形成に対する意識、仕事と家庭の両立に関する認識などについて尋ね、語りの内容を質的に分析した。

分析の結果、コロナ禍による景気の不況、雇用環境の悪化、収入の不安定化に影響され、調査対象者の就労意欲が強まり、結婚・出産を機に退職するまたは雇用形態を変更する意向が低下する傾向がみられた。総じて、対象者の性別役割分担意識はより平等な方向へと移行する傾向があったが、一方で、伝統的な性別役割分担の影響が依然として根強く残っていることも明らかとなった。以上の分析結果から、若年女性の性別役割分担意識は、固定的かつ一貫したものではなく、就業経験や家族関係、将来のライフコースに対する見通しなどとの関係のなかで揺れ動き、再構築される流動的なものであることが示唆された。また、コロナ禍は、従来のジェンダー規範や性別役割分担を改めて捉え直す契機となり、意識の再構築に関わる一つの要因となった可能性が示された。

キーワード：ジェンダー 家族 文化変容

会場2

教職課程における講義の水準と講義方法 ～全入時代の大学での教員養成～

郡山女子大学生活科学部生活科学科

齋藤 忠和

文科省は、教員志願者が減る中、次期学習指導要領に対応できる室の高い教員の育成を図るため、教職課程を改編し、カリキュラムを基礎と専門性に分ける改革を目指している。そこでは必修の基礎科目の単位を減らし、その分、専門性を高める科目(AI・データサイエンス・日本語指導など)を増やし、教員免許取得者・教員採用試験志願者の増加を目指すという。その根底にあるのは、教員採用試験の競争倍率を上げれば、良い生教員が増えるという皮相な発想である。

しかし、教職課程で目指すものは、真に優れた教員となるための資質の育成である。教員に求められる資質は、上記のような単位数の増減と科目の一部入れ替えなどで解決できるものではない。また教員の資質についても、曖昧なままである。

さらに全入時代の大学では、受験学力に過ぎないのだが、厳しい学生も増えている。本学の場合は、教職課程を含め、学生全般が、その心根は優しく、講義にも熱心かつ真面目に取り組んでいる。しかし、インターネットに依存し、読解力や読書量に関しては心許ない部分もある。こうした学生を、学び続ける教員へと育成するためには様々な工夫が、教材・講義方法において求められる。

本報告では、1年生の「教育原理」と3年生の「特別活動・総合的な学習の時間の指導法」で用いた教材・方法(質問紙、アタック・ミー、対話型講義)などを例示・検証し、大学の教職課程で、担当教員は何をなすべきかを考える。

キーワード：教職課程・教員養成・全入時代・講義方法

会場2

保育現場における組織的連携を支援する可視化フレームワークの研修導入 ―教職員の受け止め方と情報共有上の課題:第1報―

会津大学短期大学部幼児教育・福祉学科

吉田 亜矢

1. 背景と目的

保育現場では、子どもへの支援において、教職員間で子どもの状況や支援方針を共有し、役割を調整する組織的連携が重要である。本研究では、A 幼稚園からの研修要請を契機に、「見とりのメガネ」「情報のバトン」「役割の帽子」等から構成される可視化フレームワークを導入した。本研究の目的は、フレームワークに対する教職員の受け止め方と、情報共有・連携に関する課題を探索的に検討することである。

2. 方法

A 幼稚園の教職員 15 名のうち園長を除く 14 名を対象に研修を実施した。研究目的、参加の任意性、匿名化したデータの学術利用等を説明し、書面による同意を得た。事前・事後調査の回答を照合できた 11 名を分析対象とした。本研究は会津大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：2026 会大企第 74 号）。事前・事後調査は記述統計により比較し、自由記述は、情報共有や組織的連携に関する内容に着目し、質的記述的に分析した。

3. 結果と考察

事前・事後調査では、情報共有や役割分担に関する全項目で平均値の上昇がみられた。自由記述では、「情報のバトン」による情報共有や、「役割の帽子」による役割分担の必要性に関する記述がみられた。特に、パート・補助職員では、自身の役割や他職員との連携を意識した記述がみられた。一方、多忙時には従来の情報共有へ戻ることへの懸念や、担当者間で共有された情報が代替・預かり保育担当者へ十分に伝達されない課題も示された。

4. 結論と今後の課題

本フレームワークは、教職員から情報共有や役割分担を支援するツールとして受け止められる可能性が示唆された。一方、組織的連携を継続的に機能させるためには、情報共有を支える仕組みづくりが課題である。実施済みの 1 か月後追跡調査を分析し、情報共有と組織的連携の定着過程について第 2 報として報告する予定である。

キーワード：組織的連携組織的連携、情報共有、可視化フレームワーク

会場2

譜面と現象

—譜面主義から再考する西洋科学の再現可能性—

日本大学 文理学部哲学専攻

中野 実花

本発表では、「譜面主義 (score-centerism)」という、西洋音楽文化において譜面を中心に音楽を理解する傾向と、その枠組みが他の文化や知の形態を周縁化する可能性について論じる。譜面主義とは、音楽作品の本体を譜面に求め、実際に鳴らされる音をその再現として従属的に捉える立場である。リディア・ゲーアは、このような作品概念が即興音楽などを過小評価することを指摘した。

本発表ではさらに、この「譜面と現象」の関係を音楽の領域に限定せず、西洋科学の知識観へと拡張する。すなわち、西洋科学は再現可能で一般化できる知識を中心に据える一方、個別的な状況に対処する実践知や、一回的な現象についての知を周縁化してきたのではないか、という仮説を提示する。

また、その思想的源流の一つとして、ピタゴラスおよびピタゴラス派を再検討する。宇宙を数的調和に基づく秩序として捉える思想が、世界は記述可能であり、同一の形式によって再現可能であるという西洋文化の志向を強めた可能性を考察する。

本発表の目的は、この仮説を完成された理論として提示することではなく、その射程と限界を検討することにある。音楽史・科学史・比較文化論の観点から意見を募り、譜面主義によって見落とされてきた文化や知の再読へ向けた理論的基盤を整えたい。

キーワード：譜面主義 (score-centerism)、再現可能性、ピタゴラス派